

セラフィム・ゾーン  
熾天使空域4

銀翼少女達の決戦

榊 一郎

*Ichiro Sakaki*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

原案・監修 松田未来  
口絵・挿画 BLADE

目次

序章

9

第一章 限界

16

第二章 暗殺

76

第三章 決戦

143

終章

212

あとがき 榊一郎

218

松田未来

221

とよ さき しょう いち ろう  
**豊崎将一郎**

工学系の専門学校生。  
曾祖父が第二次世界大戦中、日本海軍の戦闘機乗りだったこともあり、飛行機についての知識をもつ。



おい はま みお  
**追浜 滯**

将一郎のはとこ。天真爛漫でおっとりしているが、その分、鈍くさい。日本海軍零式艦上戦闘機五二型の『エッセンス・モデル』に突如選ばれた。



零式艦上戦闘機二一型の出力先に選ばれた少女。重傷を負ったことで、新たな局地戦闘機紫電二一型、通称「紫電改」を埋め込まれる。

かすみ が うら み さき  
**霞ヶ浦海咲**



将一郎と同じアパートで暮らす  
アメリカ人少女。元はグラマン  
F 6 F 〈ヘルキャット〉、今は  
グラマンF 7 F 〈タイガーキャ  
ット〉の『エッセンス・モデル』。

## アンジェリーナ・ テイラー



グラマンF 8 F 〈ベアキャッ  
ト〉の『エッセンス・モデル』。  
大破したアンジェリーナの『心  
臓』を中心として修復・再生さ  
れたので、基礎的な知識以外、  
記憶を持たない存在に。

双子で、P-38 〈ライトニ  
ング〉の『エッセンス・モ  
デル』。

## ルーナ (姉) & ステラ (妹)



## フー・ファイター

適格者にエッセンス・  
モデル出力を実行する  
謎の存在。



熾セラ天使フイム空域ソーン4

銀翼少女達の決戦



## 序章

各務原飛行場かかみがはら

此処ここは、明治九年に陸軍第三師団が設置した砲兵演習場が前身の軍事拠点きぎょてんである。

この当時は未だ『航空兵力』というものは、戦争の趨勢すうせいを変える程のものではなかった——少なくともそう認識されていた。

だが第一次世界大戦において西欧諸国が用いた航空兵力は、戦況せんきやうを一変させる程の効果を發揮はつきし……これに刺激しげきされた陸軍中央部は、航空兵力の強化を痛感。常設の航空部隊の新設を発令し、大正四年からこの各務原において飛行場の整備が開始された。

そして大正六年六月——陸軍は、各務原飛行場を開設。

この地は日本で初めての軍用飛行場となった。翌大正七年には所沢しよざわの航空第二大隊が移転。これを機に、各務原飛行場は陸軍航空の拠点とし

て確固たる地位を得る事になる。

そして――

「……ふうむ」

その飛行場の片隅。

そこで数名の男達が、駐機された一機の軍用機に興味深げな視線を注いでいた。

細身の胴体に、定番とも言える中翼の配置。

左右の主翼にそれぞれ一基ずつの発動機を配置された、いわゆる双発機だ。

「同じ陸軍機ではあるが――」

まるで幼子の身体を撫でるかのようにそつと、プロペラ回転翼の翼端に触れて、今尾正陸軍少佐は言った。

「このキ83はあちらとは随分と違う印象だな」

「少佐。こいつは双発機ですよ？」

今尾少佐の言葉を聞いて部下が首を傾げる。

「そりゃあ単発のアレとは違います」

「双発になった分、重くなってるんじゃないのか？ 操縦系が重いのは勘弁して欲しいが」

部下の隣に立つ大尉の階級章を付けた操縦士が腕組みをしながら言った。

いかにも昔気質といった雰囲気、ただでさえ厳めしい顔を、今は更にしかめている。どうやらこの操縦士は、目の前の試作機が今一つお気に召さない様だ。

「確かに今時、巴戦は流行らないのかもしれないが、いざとなった時にものを言うのは旋回半径の小ささだと俺は思う。そういう意味でこいつはどうなんだろうな」

「少なくとも俺は一〇〇式司偵よりは操縦桿が軽いと思つたがなあ」

更にもその隣で中尉の階級章を付けた男が、先の台詞の後を受けて言った。

こちらにも操縦士で――彼は既に、この機体を数

回飛ばしている。

今尾少佐を含め、男達は全員が操縦士、それも新型機の出来を評価し、来たるべき量産機への改良点を洗い出す為に集められた人材——いわゆるテストパイロットだ。

どうやら彼等にとって階級の上下はあまり意味を持たない様だった。少なくとも佐官を前にしながら大尉も中尉も直立不動で緊張している様子はないし、口調もひどくざつくばらんなものである。階級社会の典型とも言うべき軍隊において彼等の態度は珍しい、というより異常とも言える気易さだった。忌憚ない意見を出し合う為、試作機評価の場においては階級の事は忘れろ、と今尾少佐が何度となく告げてきた成果だろう。

「こいつは二〇〇〇馬力の双発だぞ？ 後ろを取られそうになったら馬力を活かして逃げ切ればいいんだ」

更に別の操縦士が身振り手振りを交えながらそう主張する。

彼の意見には今尾少佐も同感だった。

「そうだな。それにこいつは素性がいい。排気関係に問題が殆ど起きてないしな。おかげで馬力が稼げる」

「その馬力をどう活かすが、俺達に与えられた課題な訳だな」

「あとは……これは言っても仕方ないことかもしれないが……燃料がな……」

と中尉が溜息をつく。

「最近じゃすっかり燃料の質も落ちてるからなあ」

確かに燃料の質は日に日に落ちている。

元々この戦争——太平洋戦争が長引く事になった要因の一つが、日本に殆どない石油資源を東南アジアに求めた事である。

蘭印の油田地帯が手に入っていた頃はまだ良かったが、アメリカ軍による通商破壊でろくに石油が届かなくなり、南方では負け戦が続いていると伝え聞く。

大本営がいくら威勢のいいことを言っているても、軍の内部にいる人間には——特に幾度となく実戦を経験してきた現場の人間達には、この戦争が間もなく最悪の形で終わる事は充分に予見出来ていた。

だが、それは未だ絶対ではない。確定した未来ではない。

だからこそこうして、技術者達は血眼になって新型機を開発し、操縦士達は命懸けでこれを評価してその完成を急ぐ。敵と戦って撃墜される可能性こそ少ないが、未だ開発途上にある新型機に乗るのは、戦闘とは別の危険がつきまとうのだ。

「……………」

今尾少佐は機首に眼を向ける。

そこには二門の二〇ミリ機関砲と、三〇ミリ機関砲が装備されていた。航空機としてはかなりの重武装と言って良いだろう。

「馬力を活かして一撃離脱。それでいいじゃないか。高度は位置エネルギーという形で保存されていて、急降下すればそれは運動エネルギーに変換される。そして、上昇する時には失われる運動エネルギーをこの二〇〇〇馬力の双発が補ってくれるんだ」

それは今尾少佐が事ある毎に口にしていた理論だった。

空中戦は我慢比べだけで決まる訳ではない。如何にエネルギーを上手く使ってやるかのだと彼は常日頃から部下に説いていた。

だが……彼の持論は実のところ『早すぎた』代物だった。

未だ有視界戦闘が基本のこの時代、戦闘機による空中戦も、多分に操る人間個人の感覚や才能によつて勝敗が決まる場合が少なくなかつた。戦術よりも戦技、更に大事なのは根性……そう考へてゐる操縦士も数多かつた時代である。精神論が幅を利かせる現場で物理法則を懇々と説いても理解はされにくい。

今尾少佐が学者肌だつた事もあり、多くの者は彼が持論を説いても『また博士のご高説が始まつた』と聞き流される事も多かつたのだ。

「また今尾さんのエネルギー論が始まつたか」

「理屈としては合つてるかもしれないけど、それこそ机上の空論じゃないですかね？」

「第一、空中戦をやつてゐる時にそんな事を考へてゐる余裕なんてありません」

今尾少佐の言説は皆に知れ渡つてゐるものの、あまり操縦士達の間での反応は芳しくない様だつ

た。今尾少佐は短く溜息をつくと、改めて——むしろ部下達ではなく自分自身に言い聞かせる様にして言つた。

「なんにせよ、こいつは予想以上に軽快に飛べる事がハッキリしている。俺は命を懸けなきゃならん時には、こいつに乗つて出撃したい」

「——ま、今後こいつで闘う機会があるかどうか問題ですな」

その眩きにも似た言葉を部下の一人が聞きつけて、混ぜ返す様に言つた。

「何しろ今の戦局ときたら……」

「おい、今の発言は問題だぞ。憲兵や特高に聞かれたらどうする」

大尉が片方の眉を上げてそう言つた。

「今の発言？ 何のこつた？」

「俺は何も聞いとらんぞ？」

男達の間から笑い声が湧いた。

此処には仲間を『売る』様な奴は居ない。誰も  
が新しい戦闘機をより良くする為に必死なのだ。  
今尾少佐の理論を受け入れるかどうかは別として  
も、仲間を信じていなければ試作機の評価試験飛  
行など、やっていられない。

だからこそこうして軽口もたたける。

だが――

「……………」

今尾少佐は勿論、分かっていた。

自分達が試験しているこの新型機の登場は遅す  
ぎた。あまりにも遅すぎたのだ。

恐らくこの機体が量産されたところで、日本が  
今から戦局を覆して米英に勝てるとは思えない。  
そもそも物の量が違うのだ。それを今尾少佐は思  
い知らされていた。

忸怩たる想いを噛み締めながら、しかしだから  
といって自分達の仕事を無駄だと放り出す訳にも

いかない。

いや。むしろ遅すぎたからこそ――

「こいつが完成すれば、あの忌々しいB29も何と  
か出来るかもな」

「……ですね」

キ83は元々、中国大陸における爆撃機護衛の任  
に就く為に計画され設計された機体だ。

だがこれは一九四三年秋に大幅に変更になった。  
既に大陸における航空戦闘に関して、日本軍は防  
戦一方――迎撃に徹する状態になっており、爆撃  
機による長距離侵攻は殆ど行われなくなった。

代わりにキ83に期待されたのは、本土に飛来す  
る様になった高々度爆撃機B29の迎撃や、速度を  
活かした偵察任務である。

つまり、日本は既に支配域を拡大するどころか、  
本土を守る事に徹せざるを得ない状態にまで追い  
込まれているという事になる。

既にこの戦争において日本の勝利は——当初、日本が思い描いた様な勝利は無い。

それは多くの将兵達が感じていた事だった。

だが……粘り続ければ、勝てはしなくとも、より有利な条件で講和が出来るかもしれない。

それは恐らく——より多くの日本人の命を救う筈だ。

前線で戦っている兵士だけではない。この戦争が終わった後の、一般国民達の命をも、より多く救えるかもしれない。

今尾少佐は、ふと田舎に疎開中の妻子を脳裏に思い描く。

未だ見ぬ子々孫々の為にも、自分達の努力は無駄にはならない。無駄にしてはいけない。

「俺達が試験するこの機体には、多くの人命が懸かっている」

それは誰に言うともない、単なる眩きであった

のだが。

「……………」

部下達は言葉も無く——ただ今尾少佐の言葉に揃って頷いた。

# 第一章 限界

工学系の専門学校は大抵の場合……男女比に著しい偏りが出る。

一つの学級に女子が一人、なんてことも別に珍しくない。

しかも専門学校というのは特定の業種に特化している分だけ、こなすべき課題は具体的でその種類と分量も多く、真面目に学ぼうとすればするだけ余暇も——遊ぶ時間も限られてくる。となると学校に拘束される時間は増え、それに反比例して学外で異性と出会う機会も限られる訳で。

つまりは『カノジヨ？ 何それ美味しいの？』的な奴らの吹き溜まりになることが多い。

異性関係に関しては、とにかく不遇な青春を送っている者が殆どだ。

だからこそ、そうした環境下では『彼女持ち』は妬み嫉みの対象になりやすい。

それどころか——実際には恋人なんて居なくて

も、女の子の友人知人が多い、というだけで激しく僻ひがまれたりもする。

例えば……この俺、豊崎将一郎とよさきしやういちろうのように。

「おい、豊崎い……」

今日も今日とて昼休み……学食で昼飯を食つていた俺の所に、同級生が二人ばかりやってきてねちっこく絡からんでくる。

「お前はいいよなあ」

「なにが？」

と、とりあえず俺はとぼけてみる。

連中の言いたいことは勿論分かつているが、だからといって『へへへ。羨うらやましいか。羨うらやましいだろう』などと言おうものならば、どんな制裁行為が待ち受けているか分かつたものではない——というか大体想像がつくので極力回避きょりよくかいひしたい。

「何しろ女子高生二人も囲かこつてる上に」

「碧あおい目の嫁よめさんと同棲どうせいまでしてんだからよお」

絡からんできた同級生——田中たなかと工藤くどうという——はじつとりとした視線を俺に向けながらそんなことを言ってくる。

同棲どうせいも何も、普通ふつう、嫁よめとは一緒いっしょに住むものだろう——などという突つつ込みも頭の片隅ひしほに浮うかんだけれども、問題は勿論もちろんそういう話わではなく。

「だから嫁よめさんって何だよ。アンジェはそんなじゃねえって言いつてるだろ」

「嫁よめさんじゃなきや何なになんだよ。大体アンジェとか愛称べつネームで呼び捨てとか」

「毎日部屋へやに来て炊事すいじとか洗濯せんたくまでしてくれてんだろ？」

「通とい妻つまってやつ？」

「アナタ、お疲れ様、お食事にします？ お風呂

呂ろにします？」

「『それともアタシ？』」

「しかも裸はだかエプロンで——くわあ、許ゆるせん！」

勝手に妄想の翼を広げて憤る田中と工藤。

どうでもいいけど何なんだその典型的すぎる妄想は。

「本当、世の中って不公平だよな」

二人は俺を挟むように左右に座りながら言った。

「こんな冴えないヤツに三人も美少女がくっついてるってのに」

「……………」

いやまあ、俺が取り立ててイケメンな訳でも、

金持ちな訳でも、特定の技能に突出した天才でもないのはその通りなのだが。田中や工藤の言う

『美少女』達が俺の傍に居るのはちゃんと理由がある。それも洒落にならない深刻な理由が。

だがそれを彼らに説明する訳にはいかない。

彼女らが俺としばしば行動を共にしている理由、それを秘密にすることは、彼女らを守る為にも必要だ。だからこそ俺はこうして、同級生に妬まれ

嫉まれやつかまれても、本当のことを言えないまま堪え忍ばなければならぬ訳だが。

「なあおい豊崎」

がっしと工藤が俺の肩に手を回してくる。

なんだ？ 珍しい反応だが。

「一人くらい俺達に回してくれよ」

と反対側からも田中が肩に手を回して言う。というか二人で両側から逃げられないように脇を固めてるのか、これ？

「そうだな、お前のはとこの……………なんていったっけ、濡ちゃんだっけ？」

田中は俺に顔を寄せて囁くように言った。

ああもう暑苦しい。

「あの子なんか俺の好みのど真ん中……………」

「断る！」

俺は田中の手を撥ね除けながら即答していた。「お前のような奴に濡を渡せるか！」

「そっだよ。紹介するなら田中じゃなくて俺にだよな？」

「お前もだよ！」

更に工藤の手も肩から払い落としながら俺は言った。

「お前のような奴って、じゃあどんな相手になら紹介するってんだよお前は」

じろりと俺の顔を睨みながら田中が問うてくる。

「まず無精髻剃れ」

と俺は言った。

「うっ……?」

反射的に自分の顎に手をやって表情を強張らせる田中。

更に――

「それから髪も切れ。伸ばすな。シャツと下着と靴下だけでも毎日替えろ」

「うっ……?」

と身を竦める工藤。

「感性に自信が無けりゃ、とりあえずスーツ——というかジャケットとパンツ姿にしとけ」

「……あ、アーミールックは、最近、流行って……」

とドイツ陸軍放出品の軍用コートを着ている工藤が呻くように言うが、俺は彼を睨みながら続けた。

「何よりもまず清潔感なんだよ！ ただでさえ俺ら、実習やら何やらで汚れること多いんだから、作業服っぽいもので学校の外をうろろろすんな。作業服ってのは綺麗にしてたって何となく汚れた印象つきまとうからな」

「……………」

「それからコートもやめろ。体形隠しのつもりかしらんが、太めの奴がコート着るとむしろだらしなく見えるんだよ。ジャケットに抵抗あるならば

ったり系のスリムジーンズに、もこもこ系のジャンパーでメリハリつけろ。むしろそっちの方が引き締まって見える」

「……………」

「そもそも長髪なんて一部の超絶イケメンか、アニメや漫画の主人公くらいしか似合わないから先ずそれやめろ。女の子から見りゃ、鬱陶しく見えるだけだから。大体伸ばしてるだけで手入れとかしてねえだろ？ シャンプーの後、コンディショナーつけてるか？」

「……………」

「安売りのいいから風呂上がった後でスキンローションもつけとけ。乾燥肌をそのままにしてると頭どころか眉からでもフケ出るぞ。女の子はどんな引きだからな」

「……………豊崎」

「なんだよ」

何故か目を丸くして固まっていた田中と工藤は、改めて身を乗り出しながら言った。

「師匠と呼ばせてください」

「呼ぶなっ!!」

悲鳴じみた声で叫ぶ俺。

ちなみに田中と工藤に言った諸々だが。

これは実を言えば俺も以前、海咲に——田中達と言う『困っている女子高生』の片方に言われたことをそのまま繰り返しているだけだ。要するに俺も以前は、田中や工藤と大差無かったのである。

「と、とにかく……………濡は俺の妹みたいなもんだからな」

咳払いを一つして俺は話を戻した。

「同級生に紹介とか出来るかよ。まかり間違ってお前に『お義兄さん』とか呼ばれた日には鳥肌立つわ」

「そうか。お前は『お兄ちゃん』って呼ばれない

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。